

毎朝、やや手狭なベランダに立って軽い運動をしながら、空や雲、木々を眺め思いを巡らして、一日がはじまる。

大抵は、自分にはどうすることも出来ない変貌する世界の様々な心配事にいらいらし、無駄に出来ない今日一日の僕自身の行動を確認する。

このルーティーンをH・IMAGE（ヒマジン）と称して、随筆にしている。コロナや僕自身の罹病で外出の機会がめっぽう減った今、ほぼ、病床六尺に臥した正岡子規の気分のもりになって書く。

・・・・・・・・・・・・・・・・

七月ははじめの朝、ベランダに立つ前の起きぬけにサプライズがあった。昨秋、当マンションのフェンスに張り付いた朝顔がすっかり枯れて、弾き落ちそうになっていた種を少し、妻が頂いていた。

その種をひと月ほど前から、ベランダに用意した鉢に蒔いていたらしい。僕が鉢の変化に気付いたのは一週間ほど前で、葉っぱが出ているのを見てからだ。それでも花をまとう様子までイメージできなかった。

## あの俳聖に送ってあげたい 一鉢



それが、あつと驚くほどの姿を披露してみせたのだ。

先に起床していた妻が、起き上がってくる僕を待ち切れないそぶりで見えて！みて！と、ベランダを指差して云う。

何と「爽やかさ」を絵に描いたような姿がまさに突然、そこにあった。浅緑の若葉ばかりと思っていた鉢に、薄紫の縁取りに包まれた白い花芯の朝顔が一気に九輪、見事に咲き誇っている。前日まで、その気配すらなかった葉っぱだけの鉢の、鮮やかな変身であった。小学一年生が初めて育て上げて味わう感動といったらよいのか、朝顔に失礼ながら、たかがアサガオにこれほど驚くことになるうとは思ってもみなかった。

しかも、そこに不思議と元気を貰える景色を感じ、しばらく朝顔鉢のベランダ風景をふたりしてじーっと眺めやることになった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

これを眼にしたら、永の病に臥して居ても生気を貰えるに違いない。早速写真にして、あの空のひとに、送ってやりたいと思った。